

わが国の大学ラグビーをとりまく環境についての調査研究

中本光彦* 安達隆博* 金澤 睦**

The Organizational Environment of Japanese Intercollegiate Rugby Football

Mitsuhiko NAKAMOTO*, Takahiro ADACHI* and Mutsumi KANAZAWA**

Abstract

The purpose of this study was to examine the environmental conditions surrounding intercollegiate rugby football in Japan. The teams surveyed included 48 teams which belong to the Kanto University taikousen A Group, Kantou University League Division I, Kansai University League A, Toukai University League A, Touhoku University League A and Kyushu University League Division I. The environment surrounding intercollegiate rugby football was surveycal in terms of three factors; hardware, software, and members. Hardware factors concerned: ① the grounds; ② the place of weight training; ③ the dormitory・residential camps. Software factors involved the ④ coaches; ⑤ sporting equipment; and ⑥ sponsorship contracts. Additionally, about ⑦ members wrer examined.

The principal results were as follows. 73.3% of the Kantou・Kansai areas and 44% of regional areas owned their own grounds for their own private use. The average number of coaches per university was 5.7 in the Kantou・Kansai areas and 1.9 in regional areas.

Five universities sign endorsement deals in the Kantou・Kansai areas, but none are signed (0) in regional areas.

Based on all remaining questionnaire items, it was clear that the Kantou・Kansai areas are in a more advantageous environment than regional areas.

From the fact that the Kantou・Kansai areas are in more advantageous environment than regional areas, it was strongly suggested that we need to create a more favorable environment for universities in these regional areas in order to promote University rugby.

I. 緒言

日本国内の大学ラグビーにおいては大学選手権と全国地区対抗大学ラグビー大会の2つの全国大会が行われている。(財)日本ラグビーフットボール協会は、このうち大学選手権において

上位入賞した大学が日本ラグビー TOP LEAGE の上位チームと対戦し、ラグビー日本一を決定する日本選手権に大学生チーム代表として出場するというシステムを採用している。大学選手権には、その地区予選に、関東対抗戦 A グループ 8 大学、関東リーグ戦 1 部 8 大学、関西大学

*嘱託講師, **教授

A リーグ 8 大学、九州大学リーグ 8 大学、北海道大学リーグ 6 大学、東北地区大学リーグ 6 大学、東海学生 A リーグ 10 大学、北陸大学リーグ 7 大学、中国地区リーグ 6 大学、四国学生リーグ 6 大学の計 73 大学が参加し、その中から 16 大学が出場する権利を得られる。大学選手権出場決定方法¹⁾の詳細は表 1 に記載する。

近年、大学選手権出場校 16 大学中 15 大学が関東地区、関西地区の代表校であり、さらに関東地区の大学が大学選手権上位を多数占める状況にある。九州リーグ代表においては第 2 回大会（昭和 40 年度）より、毎年大学選手権に出場するが、第 4 回大会（昭和 42 年度）以降 1 回戦での敗退が続いている。また東海リーグにおいては中京大学が 14 度の大学選手権出場を果たすが未勝利であり、北海道リーグ、東北リーグ、北陸リーグ、中国地区リーグ、四国学生リーグにおいては大学選手権 41 回の歴史において出場しない。過去 5 年間の大学選手権の関東第 5 代表決定戦、関西第 5 代表決定戦においても 50 点差以上の大差がつくことがほとんどであり 100 点以上の差がつく試合も珍しくはない。このような結果からも関東・関西地区とそれら以外の地方地区による実力差が顕著にあらわれていると考えられる。しかも現在の状況は地区別の実力差がさらに拡大している。今後、地区別の実力差を縮小することにより僅差の試合を数多く行うことは日本ラグビーのレベルアップを図ることに繋がると考えられる。また地区別の実力差

の要因としては練習等の環境や、部員の能力などの差があると考えられるが、これらについて考察した研究は未だ行われていない。

そこで本研究の目的を、地区別の大学ラグビー部をとりまく諸環境を調査し、日本ラグビーのレベルアップに繋がる所見を得ることとした。近年の大学選手権の結果から実力上位と考えられる関東・関西地区の 1 部に所属する全ての大学 24 校と、大学選手権出場決定戦に出場するなど、それに次ぐ実力であると考えられる九州・東海・東北地区 1 部に所属する全ての大学 24 校の計 48 校を調査対象とし、環境面をハード面について、ソフト面について、部員についての視点から諸環境の現状を考察した。

Ⅱ. 方法

(1) 調査対象

調査対象は 2005 年 4 月 1 日現在、関東大学対抗戦 A グループ、関東大学リーグ戦 1 部、関西大学 A リーグ、九州学生 1 部リーグ、東海学生リーグ A、東北学生リーグに所属する大学ラグビーチーム計 48 チームであった。

(2) 調査方法

上記の 48 チームに対して質問紙による郵送調査を行った。記入を監督に依頼した。返送を 1 週間以内と定めて依頼し、2 週間が過ぎても返信がないチームには回答を依頼する電話連絡を

表 1. 2004 年度大学選手権出場条件について

関東地域代表の予選方法	
関東リーグ戦	1 部の 1 ~ 5 位までは無条件で全国大会出場決定
関東対抗戦	1 部の 1 ~ 4 位までは無条件で全国大会出場決定
第 5 代表決定戦	北海道地区代表』対『東北地区代表校』を行い、『関東大学対抗戦 5 位』対『北海道地区代表』対『東北地区代表校』の勝者』⇒勝利チームが関東第 5 代表。
関西地域代表の予選方法	
関西大学 A リーグ	1 ~ 4 位までは無条件で全国大会出場決定
第 5 代表決定戦	『東海・北陸地区代表』対『中国・四国地区代表』を行い、『関西大学 A リーグ 5 位』対『東海・北陸×中国・四国の勝者』⇒勝利チームが関西第 5 代表

注) 関東第 5 代表決定戦は、隔年で対抗戦 5 位とリーグ戦 5 位が交代で出場する

行った。

(3) 調査内容

大学ラグビー部をとりまく環境をハード面について、ソフト面について、部員についての視点から調査した。

調査内容はハード面については①グラウンドについて②ウエイトトレーニング場について③寮・合宿所について調査した。ソフト面については④指導者について⑤練習用具・分析ソフトについて⑥スポンサー契約について調査した。またそれらとは別に⑦部員について調査した。各項目の詳細については表2に記載する。

(4) 調査機関期間

アンケートは、以下の期間内で配布、回収した。
2005年4月1日から2005年6月1日

(5) 回収率

返信があったのは関東・関西地区グループ24大学中15大学で、回収率は62.5%であった。また地方地区グループは24大学中18大学で、回収率は75%であった。

(6) 分析方法

返信があった中から関東大学対抗戦Aグループ、関東大学リーグ戦1部、関西大学Aリーグに所属するチームを関東・関西地区に、さらに東海学生リーグA、九州学生1部リーグ 東北学生リーグに所属するチームを地方地区と分類しハード面について、ソフト面について、部員についての各項目に対する回答を比較検討した。

Ⅲ. 結果と考察

調査結果を「ハード面」と「ソフト面」および「部員について」に大別して報告する。サンプルが少ないため、回答実数の比較が主となるが、参考のために百分率(%)も併記した。尚、検定は行わなかった。

[ハード面]

①グラウンドについて

グラウンドの使用形態、グラウンドの材質、監督のグラウンドに対する満足度について調査した。その結果、グラウンドの使用形態については関東・関西地区の15校中11校(73.3%)が専用グラウンドを、15校中4校(26.7%)が共用グラウンド

表2. 質問項目について

ハード面について	ソフト面について	部員について
①グラウンドについて	④指導者について	⑦部員について
所有形態	監督の指導形態	部員数
材質	監督に対する謝礼	花園出場部員数
監督の満足度	監督の年齢	高校時県選抜部員数
②ウエイトトレーニング場について	コーチの年齢	推薦入学部員数
所有形態	有給コーチ	奨学生である部員数
③寮・合宿所について	コーチの指導形態	
寮の有無	平均コーチ数	
入寮形態	ドクター	
食事	トレーナー	
平均家賃	ウエイトトレーニング指導者	
	栄養士	
	⑤練習用具・分析ソフトについて	
	練習用具	
	ゲーム分析ソフト	
	⑥スポンサー契約について	

を所有していた。地方地区においては18校中8校(44.4%)が専用グラウンドを、18校中10校(55.6%)が共用グラウンドを所有していた。グラウンドの材質については関東・関西地区の15校中7校(46.7%)が人工芝、15校中4校(26.7%)が天然芝、15校中4校(26.7%)が土のグラウンドを所有していた。地方地区においては18校中3校(16.7%)が人工芝、18校中2校(11.1%)が天然芝、18校中13校(72.2%)が土のグラウンドを所有していた。監督のグラウンドに対する満足度については、平均値が5に近い程高い満足を示し、1に近い程不満であることを意味している。本尺度を間隔尺度と仮定して平均値を求めてみると、関東・関西地区グループでは平均が2.8であった。対して地方地区グループは3.3であった。詳細は表3, 4に示す。

専用グラウンドを所持することは練習時間の確保や練習試合をすることに大変有用であり、またグラウンドの材質が人工芝、天然芝の場合は土のグラウンドに比べて、スクラムを低く、強く組むことが可能になるなどチーム力のアップに大

きく貢献すると考えられる。特に注目したい点は関東・関西地区に人工芝グラウンドの割合が高いこと、地方地区に土のグラウンドの割合が高いことである。人工芝グラウンドは近年、全国規模で普及がはじまり、メンテナンスフリー、雨天でも練習が可能といった品質からその有効性が指摘されている²⁾。一方、土のグラウンドは雨天での練習が困難であること、怪我が多く発生するなどの問題点が考えられる。以上のような点から、専用かつ芝のグラウンドを所持する割合が高い関東・関西地区が地方地区に比べてより良い練習環境であると考えられる。監督のグラウンドに対する満足度が若干地方地区のほうが高いことについては予想外の結果となった。グラウンドの使用形態や材質等、グラウンド環境そのものは関東・関西地区のほうが高いレベルにあるが、満足度は低い値を示すということは興味深い結果であった。これは関東・関西地区に所属する大学の周辺環境レベルが高いこと、関東・関西地区の大学の方が地方地区の大学のよりも部員数が多いこと、地方地区の大学の目標と

表3. グラウンドについて

	関東・関西地区 (n=15)		地方地区 (n=18)	
	n	(%)	n	(%)
使用形態				
専用グラウンド	11	73.3	8	44.4
共用グラウンド	4	26.7	10	55.6
材質				
人工芝	7	46.7	3	16.7
天然芝	4	26.7	2	11.1
土	4	26.7	13	72.2

表4. 監督のグラウンドに対する満足度について

	関東・関西地区 (n=15)		地方地区 (n=18)	
	n	%	n	%
1 不満	5	33.3	3	16.7
2 やや不満	2	13.3	2	11.1
3 普通	2	13.3	4	22.2
4 やや満足	3	20.0	4	22.2
5 満足	3	20.0	5	27.8

するレベルが関東・関西地区よりも低いことなどが影響したのではないかと考えられる。各地区ともグラウンドのどのような点に満足し、不満を感じているか点を明らかにする等、今後の研究に対する課題ともいえるのではないだろうか。

②ウエイトトレーニング場について

ウエイトトレーニング場の所有形態については関東・関西地区の15校中7校(46.7%)が専用ウエイトトレーニング場を、15校中8校(53.3%)が共用ウエイトトレーニング場を所有していた。地方地区においては18校中1校(5.6%)が専用ウエイトトレーニング場を、18校中17校(94.4%)が共用ウエイトトレーニング場を所有していた。詳細は表5示す。

関東・関西地区の方が地方地区よりも高い割合で専用ウエイトトレーニング場を所有していることが明らかとなった。ラグビーは選手の体格や筋力がパフォーマンスに大きく影響を与える競技であり、ウエイトトレーニングは欠かせないトレーニングであるといえる。専用ウエイトトレーニング場を所持することは雨天時や練習前後にも自由にトレーニングが可能であり、また長期的なウエイトトレーニング計画も立て易い。地方地区ではほとんどの大学で専用ウエイトトレーニング場がなく、関東・関西地区が地方地区に比べてより良い練習環境であると考えられる結果であった。

③寮・合宿所について

寮・合宿所の有無についてみると関東・関西地区において15校中13校(86.7%)が寮有り、15校中2校(13.3%)が寮無しであった。

地方地区においては18校中8校(44.4%)が寮有り、18校中10校(55.6%)が寮無しであった。入寮形態においては関東・関西地区の15校中9校(60.0%)が全寮制、15校中3校(20.0%)が個人の自由、15校中1校(6.7%)がその他であった。地方地区においては18校中3校(16.7%)が全寮制、18校中3校(16.7%)が個人の自由、18校中2校(11.1%)がその他であった。寮・合宿所の食事については、関東・関西地区では食事支給日数は1週間に6.18日、1日に2.18食であった。地方地区では食事支給日数は1週間に4.88日、1日に1.63食であった。寮・合宿所の家賃については関東・関西地区が平均41958円、地方地区が43000円であった。詳細は表6に示す。

寮・合宿所についての調査は関東・関西地区の方が地方地区よりも、寮がある大学・入寮形態が全寮制の大学が多いという結果となった。寮・合宿所があれば学生をある程度管理することができ、またミーティング等を行いやすいなどといった部員同士のコミュニケーションをとる機会が増えるという利点がある。また寮・合宿所で食事を支給すれば学生は時間的・肉体的な負担が少なく食事をとることができ、非常に大きな利点があると考えられる。今回の調査では、1週間あたりの食事支給日数、1日あたりの食事回数ともに関東・関西地区が地方地区を上回る結果となった。前述したとおりラグビーにおいては体格がパフォーマンスに大きな影響を与えるため、食事は大変重要な要素と考えられる。寮・合宿所の平均家賃は僅かだが関東・関西地区の方が安いという結果となった。一般的に関東・関西地区の方が地方地区よりも地価の高い都市に大学があるが、大学やOB会から

表5. ウエイトトレーニング場について

	関東・関西地区 (n=15)		地方地区 (n=18)	
	n	(%)	n	(%)
所有形態				
専用ウエイトトレーニング場の所有	7	46.7	1	5.6
共用ウエイトトレーニング場の所有	8	53.3	17	94.4

表6. 合宿所・寮について

	関東・関西地区地区 (n=15)		地方地区 (n=18)	
	n	(%)	n	(%)
寮の有無				
寮有	13	86.7	8	44.4
寮無	2	13.3	10	55.6
入寮形態				
全寮制	9	60.0	3	16.7
個人の自由	3	20.0	3	16.7
その他	1	6.7	2	11.1
食事について				
食事支給日数	6.18日 / 1週間		4.88日 / 1週間	
食事回数	2.18食 / 1日		1.63食 / 1日	
平均家賃	41958円		43000円	

の補助が地方地区よりも大きいことこのような結果となったと考えられる。以上のような点からも寮・合宿所について関東・関西地区の方が地方地区よりも優位な環境であると考えられる。

[ソフト面]

④指導者について

本研究では調査の段階から、フルタイムをほぼ全ての練習に参加して指導にあたるもの、またパートタイムを毎回は練習に参加しないが週に数回は指導にあたるもの定義した。

a) 監督

監督の指導形態については、関東・関西地区においては15校中9校(60.0%)がフルタイム、15校中6校(40.0%)がパートタイムであった。地方地区においては18校中6校(33.3%)がフルタイム、18校中10校(55.6%)がパートタイム、18校中2校(11.1%)が未回答であった。監督に対する謝礼については、関東・関西地区において15校中6校(40.0%)が大学から支払われて、15校中2校(13.3%)がOB会から支払われて、15校中7校(46.7%)が謝礼なしであった。地方地区においては18校中6校(33.3%)が大学から支払われて、18校中10校(55.6%)が謝礼なし、18校中2校(11.1%)が未回答であった。監督の年齢につ

いては関東・関西地区において平均48.8歳、地方地区においては平均47.7歳であった。詳細は表7に示す。

監督の指導形態において、強豪地区の方が地方地区よりフルタイムで指導する監督の割合が高かった。より組織的に、より緻密になりつつある近代ラグビーでは監督の意向を部員が共有することは非常に重要なことであり、そのための指導時間の確保もまた重要であると考えられる。次に監督の謝礼については大きな差は見られなかった。強豪地区の方が多くの大学で謝礼を受け取っていると予想したが、大学の教員や職員として雇用される場合や企業からの出向として給与を得ている場合も考えられそれほど差が出なかったものと考えられる。また監督の年齢にも大きな差は見られなかった。近年、プロ化によって変化が一層早くなる近代ラグビーに対応するべく、トップレベルのチームにおいても20歳代、30歳代といった若い指導者が増えてきた。その影響からか強豪地区、地方地区ともに指導者の世代交代が進み、筆者の予想よりも低い年齢となった。

b) コーチ

コーチの年齢について、関東・関西地区は30歳未満が89人中21人(25.9%)、30歳代が89人中46人(56.8%)、40歳代が89人中13人

表7. 監督について

	関東・関西地区 (n=15)		地方地区 (n=18)	
	n	(%)	n	(%)
監督の指導形態				
フルタイム	9	60.0	6	33.3
パート	6	40.0	10	55.6
未回答	0	0.0	2	11.1
監督に対する謝礼				
大学から	6	40.0	6	33.3
OB会から	2	13.3	0	0.0
謝礼なし	7	46.7	10	55.6
未回答	0	0.0	2	11.1

表8. コーチについて

	関東・関西地区		地方地区	
	n	(%)	n	(%)
コーチの年齢				
30歳未満	21	25.9	8	27.6
30歳代	46	56.8	13	44.8
40歳代	13	16.0	5	17.2
50歳代	1	1.2	1	3.4
60歳以上	0	0.0	1	3.4
有給コーチ数				
有給コーチ	31	38.3	5	17.2
コーチの指導形態				
フルタイム	17	21.0	6	20.7
パートタイム	64	79.0	23	79.3
地区別コーチ総数	81人		29人	
1校あたり平均コーチ数	5.7人		1.9人	

(16.0%)、50歳代が89人中1人(1.2%)であった。地方地区は30歳未満が29人中8人(27.6%)、30歳代が29人中13人(44.8%)、40歳代が29人中5人(17.2%)、50歳代が29人中1人(3.4%)、60歳以上が29人中1人(3.4%)であった。有給コーチについては関東・関西地区が89人中31人(38.3%)、地方地区が29人中5人(17.2%)であった。コーチの指導形態については関東・関西地区においては89人中17人(21.0%)がフルタイム、89人中64人(79.0%)がパートタイムであった。地方地区においては

29人中6人(20.7%)がフルタイム、29人中23人(79.3%)がパートタイムであった。1校あたりの平均コーチ数は関東・関西地区が5.7人、地方地区が1.9人であった。詳細は表8に示す。

コーチについては年齢、指導形態ともに地区差はあまり見られなかったが、有給コーチと1校あたりの平均コーチ数に大きな差が見られた。関東・関西地区においては有給コーチの割合が多く、コーチングの有資格者や外国人コーチといったプロコーチが多く含まれるのではな

いかと考えられる。近年ラグビーはルールの変遷とともに大きく変化しており、最新の理論や練習方法を習得したコーチがいることはチームにとって非常に優位に働くと思われる。また1校あたりの平均コーチ数が地方地区よりも関東・関西地区の方に多いことについては大きな差であると考えられる。なぜならラグビーは求められるスキルや判断がポジション別に大きく異なり、様々なポジションを経験したコーチが数多くいることは戦力のアップに繋がると考えられるからである。平均部員数で除すれば同等の数となるが、実質は部員数の多い都市校では午前中はAチーム、午後はBチームといった具合に練習時間を分けるなどしているためにコーチ一人が指導にあたる部員数は少ないと考えられ、より質の高いコーチングが可能であると考えられる。

c) その他のスタッフ

チームドクターについて、関東・関西地区においては15校中9校(60.0%)の大学に無給チームドクターがいた。また15校中6校(40.0%)の大学がチームドクターなしであった。地方地区においては18校中3校(16.7%)の大学に無給チームドクターがいた。また18校中15校(83.3%)の大学がチームドクターなしであった。トレーナーについては関東・関西地区では15校中14校(93.3%)の大学に無給トレーナー、15校中7校(46.7%)の大学に有給トレーナーがいた。地方地区においては18校中8校(44.4%)の大学に無給トレーナー、18校中3校(16.7%)の大学に有給トレーナーがいた。ウエイト指導者について、関東・関西地区においては15校中11校(73.3%)の大学に無給ウエイトトレーニング指導者、15校中8校(53.3%)の大学に有給ウエイトトレーニング指導者がいた。地方地区においては18校中6校(33.3%)の大学に無給ウエイトトレーニング指導者、18校中2校(11.1%)の大学に有給ウエイトトレーニング指導者がいた。また18校中12校はウエイト指導者なしであった。栄養士については関東・関西地区では15校中3校

(20.0%)の大学に無給栄養士、15校中1校(6.7%)の大学に有給栄養士がいた。地方地区においては18校中2校(11.1%)の大学に無給栄養士、18校中1校(5.6%)の大学に有給栄養士がいた。詳細は表9, 10に示す。

チームドクター、トレーナー、ウエイトトレーニング指導者においてはいずれも関東・関西地区の方が地方地区よりも多いことが明らかとなった。ラグビーは怪我が多く発生する競技であり、その治療に携わるドクター、リハビリに携わるトレーナーは大変重要な存在であると考えられる。また前述したとおりウエイトトレーニングはパフォーマンスに大きく影響を与え、トレーニングメニューの作成、正しいフォームの指導といった専門的な指導を行うウエイトトレーニング指導者も重要な存在であると考えられる。栄養士においては若干、関東・関西地区の方が多かった。しかしどちらの地区においても数値的には極めて少ない結果であった。食事はあらゆるスポーツで重要な要素であり、栄養士を多くのチームにスタッフとして参加させることは日本全体の課題といえるのではないかと考える。今後、大学のみならず、あらゆる年代において選手の栄養を管理するスタッフを得ることは日本ラグビー界にとって重要な事項であるといえるのではなかろうか。総じて、監督・コーチ・その他の指導者といった指導体制において関東・関西地区の方が地方地区よりも優位な環境であると考えられる。

⑤練習用具・ゲーム分析ソフトについて

練習用具については関東・関西地区において、各平均でタックルバックが8.9個、コンタクトバックが20.0個、コンタクトスーツが25.8着、マーカーが49.2個、ビブスが22.5着、練習使用ボールが28.9個、年間使用ボールが78.2個、撮影用ビデオが2.2台、スクラムマシンが2.0台であった。地方地区において、各平均でタックルバックが6.5個、コンタクトバックが10.2個、コンタクトスーツが13.4着、マーカーが34.4個、ビブスが16.3着、練習使用ボールが13.3個、年間使用ボールが27.9個、撮影用ビデオ

表9. その他のスタッフの有無

	関東・関西地区地区		地方地区	
	n	(%)	n	(%)
チームドクター				
無給	9	60.0	3	16.7
有給	0	0.0	0	0.0
チームドクターなし	6	40.0	15	83.3
トレーナー				
無給	14	93.3	8	44.4
有給	7	46.7	3	16.7
トレーナーなし	0	0.0	10	55.6
ウエイトトレーニング指導者				
無給	11	73.3	6	33.3
有給	8	53.3	2	11.1
ウエイト指導者なし	3	20.0	12	66.7
栄養士				
無給	3	20.0	2	11.1
有給	1	6.7	1	5.6
栄養士なし	12	80.0	16	88.9

表10. その他の指導者について平均人数

1校あたりの平均 (人)	関東・関西地区地区	地方地区
	mean	mean
チームドクター	0.73	0.17
トレーナー	2.53	0.67
ウエイトトレーニング指導者	0.80	0.39
栄養士	0.20	0.11

オが1.2台、スクラムマシンが1.1台であった。ゲーム分析ソフトについては関東・関西地区で5校が所有しており、地方地区では所有している大学はなかった。詳細は表11, 12に示す。

練習用具について、各用具とも関東・関西地区の方が地方地区よりも多く所持していることが明らかとなった。各用具を平均部員数で除すれば大きな差とはいえないが、前述したとおり関東・関西地区では、AチームとBチームといった具合に練習時間を分ける大学が多いため、実質の一人当たりの練習用具は多いと考えられる。また特に撮影用ビデオが関東・関西地区において平均2台以上を所持（多くの大学が2台から4台を所持）していた点と、ゲーム分

析ソフトを関東・関西地区のみが所持していた点に注目したい。近年ラグビーが緻密化するにあたって映像を使用したコーチングや、詳細なゲーム分析がコーチング活動において大きな役割を占めることは一般的なものとなっている³⁾。映像を使ったコーチングやゲーム分析を用いたコーチングにも今後の課題が報告されている⁴⁾が、最先端の指導を行える環境であるといった点からも練習用具・分析ソフトについて関東・関西地区の方が地方地区よりも優位な環境であると考えられる。

⑥ スポンサー契約について

関東・関西地区グループにおいては15校中5

表11. 練習用具について

練習用具	関東・関西地区地区 (n=15)	地方地区 (n=18)
	(平均所有数)	(平均所有数)
タックルバック	8.9	6.5
コンタクトバック	20.0	10.2
コンタクトスーツ	25.8	13.4
マーカー	49.2	34.4
ビブス	22.5	16.3
練習使用ボールボール	28.9	13.3
年間使用ボール個数	78.2	27.9
撮影用ビデオ	2.2	1.2
スクラムマシン	2.0	1.1

表12. 分析ソフトについて

分析ソフト	関東・関西地区地区 (n=15)	地方地区 (n=18)
	分析ソフトを所有	5校

大学（20％）がスポンサーとの契約を結んでいることが明らかとなった。しかし地方地区グループにおいてはスポンサーと契約を結んでいる大学はなかった。スポンサー契約をもつ大学側の行動としては①公式戦や練習試合や練習において企業のロゴ入りのジャージを着用、②ゴールポストや看板などに企業名を入れる、③企業製品を割引価格で購入などであった。一方、スポンサー企業側の行動としては①公式戦用ジャージの支給、②練習用品・スタッフユニホーム等の支給、③イベントの企画などであった。

調査の結果から、スポンサー契約を結んでいる大学は関東・関西地区のみにみられた。ラグビーのプロ化容認以後、日本代表も2001年9月から大正製薬とスポンサー契約を結び、大学ラグビー界においても早稲田大学がアディダスとスポンサー契約を結ぶなど様々な形態でのスポンサーシップが発達してきている⁵⁾。

企業が学生の練習用具などを支給するメリットは学生の負担が軽減し、また統一の練習用具を所持することで一体感を得られることが考え

られる。またそれら企業側の行動が新入部員の勧誘などにも好影響を与え、より一層のチーム力の向上を図られるといった好循環を生み出すと考えられる。このような点からもスポンサー契約について関東・関西地区の方が地方地区よりも優位な環境であると考えられる。

【部員について】

1校あたりの部員数、部員の経歴などを調査した結果、関東・関西地区では15校の平均部員数が84.1人、全国高校選抜大会（以下は花園と表記）出場経験のある部員が12校の平均で20.5人、高校生時に県選抜であった選手は11校の平均で24.5人、推薦入学部員は13校の平均で48.7人、奨学生である部員は10校の平均で3.5人であった。地方地区では18校の平均部員数が36.6人、花園出場経験のある部員が15校の平均で6.3人、高校生時に県選抜であった選手は15校の平均で6.7人、推薦入学部員は16校の平均で17.6人、奨学生である部員は14校の平均で0.6人であった。詳細は表13に示す。

部員についての調査では部員数、部員のキャ

表13. 部員について

	関東・関西地区地区		地方地区	
	mean	n	mean	n
部員数	84.1	15	36.6	18
花園出場部員数	20.5	12	6.3	15
高校時県選抜部員数	24.5	11	6.7	15
推薦入学部員数	48.7	13	17.6	16
奨学生である部員数	3.5	10	0.6	14

n=回答した大学数

リア、推薦入学者数、奨学生である部員数において関東・関西地区が地方地区を大きく上回った。関東・関西地区では100名を越える部員数の大学も多く、また逆に40名以下の大学はなかった。このような結果からも部員数は地方地区との差は歴然といえる。ラグビーは怪我の発生率が高く、またポジション特性が独特なために、部員の絶対数が多いことは非常に有利であるといえる。また花園に出場した、あるいは県選抜選手として国体に出場したというキャリアを持つ選手は、大学入学時でのスキルや能力が高い選手といえる。さらに推薦入学選手、奨学生である選手が多いことは、より有能で、チームの補強方針に応じた選手を獲得しやすい状況にあると考えられる。またこのことはチーム力の強化に繋がっていると考えられる。以上のような点からも関東・関西地区の方が地方地区よりも部員について優位な環境であると考えられる。また筆者の主観的な見解ではあるが、高校時代に優秀といわれる選手のほとんどが関東・関西地区の大学に進学しプレーを続けていると思われる。今後更なる日本ラグビーの発展のために将来有望な選手の進路について更なる調査・研究の余地があるのではなからうか。

いずれの質問項目においても関東・関西地区のほうが地方地区よりも優位な環境であるということが明らかとなった。練習環境などハード面だけでなく指導者などといったソフト面や部員についても、また部員についても関東・関西地区が地方地区よりも優位であるということは、将来更なる地区格差が生まれる可能性が高いと考えられる。国内ラグビーのレベルアップ

のためには関東・関西地区のさらなるレベルアップは勿論、地方地区の環境を整えて日本ラグビーを活性化させる必要があるということが考えられる。

V. まとめ

本研究の目的は大学ラグビーをとりまく環境面の現状を調査・考察し、国内ラグビーのレベルアップに繋がる所見を得ることであった。大学選手権予選に参加する関東大学対抗戦 A グループ、関東大学リーグ戦 1 部、関西大学 A リーグ、九州学生 1 部リーグ、東海学生リーグ A、東北学生リーグに所属する大学ラグビーチーム全 48 チームが調査の対象であった。ハード面、ソフト面、部員についての 3 つの視点から調査した。質問項目はハード面については①グラウンドについて②ウエイトトレーニング場について③寮・合宿所についてであった。ソフト面については④指導者について⑤練習用具・分析ソフトについて⑥スポンサー契約についてであった。またそれらとは別に⑦部員について調査した。結果は、ハード面について、ソフト面について、また部員についてのいずれも関東・関西地区のほうが地方地区よりも優位な環境であった。中でもグラウンドについて、ウエイトトレーニング場について、指導者について、スポンサーについて、部員についての差が大きかった。特に部員については部員の数や高校生時代のキャリアに大きな差がみられ、また推薦入学者など選手補強に関する環境にも差がみられた。ハード面、ソフト面での環境の差が戦力や

選手にどのような影響を与えているか、また高校生ラグビー選手の進路についての考察が今後の研究課題として考えられるのではなかろうか。今後、大学ラグビーの地区格差はさらに大きくなる可能性が考えられ、地方地区の諸環境を整えて日本ラグビーを活性化させる必要があるということが示唆された。

参考文献

- 1) 日本ラグビーフットボール協会インターネットホームページ「大学選手権への道のり」：<http://www.rugby-japan.jp/national/college/2004/id861.html>
- 2) Spring Topics. ラグビーマガジン.6 : pp 27, 2005
- 3) Henly, G. X Factor, Queen Ann Press, pp181, 1999.
- 4) 宮尾正彦. ゲーム分析の現状と今後の課題について. ラグビー科学研究 Vol.14 : pp67, 2002.
- 5) 佐々木 康, 勝田 隆, 齊藤武利, 河瀬泰治, 山本 功, 河野一郎. ラグビーにおけるスポンサーシップ. ラグビー科学研究 Vol.14 : pp59, 2002.